

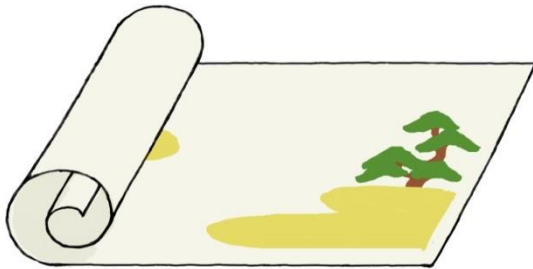
日本の装幀の歴史 2

冷泉家時雨亭調査主任 藤本 孝一

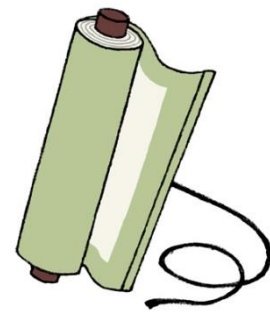
卷子本-活用（軸なし）と保存（軸付き）

「卷子本」の説明は、「書画を横長く表装して軸に巻いたもの」（『広辞苑』）が一般であろう。だが、軸付きは保存時の形態を示してはいるが、読書の歴史からみると、軸のない、紙を継いだだけの巻物「読紙（しょくし）」が卷子本本来の姿であった。

★図① 単に長い紙を巻いた物（続紙）



★図② 軸のある完成した形の卷子本



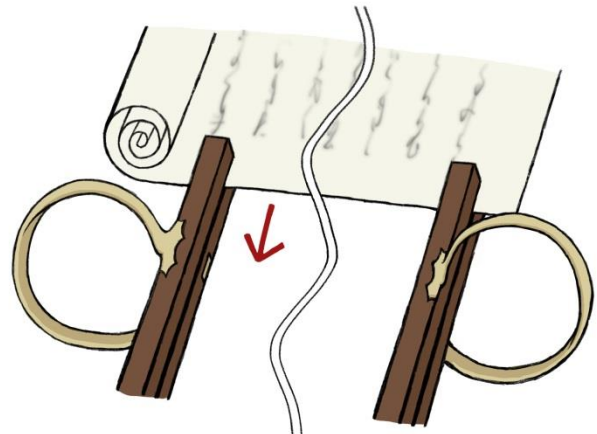
このことを端的に示すものに、正倉院宝物の書見台（紫檀金銀絵書几）がある。左右に付いた丸い金具に卷子を入れて開くようにできる。複製品（図版、奈良国立博物館蔵）に軸の付いた卷子（『杜家立成』複製）が載せられている様子を見ると、軸が突き出している分、左右に段差ができています。軸のない右側には台を履かせ、高さを合わせている。これではいちいち調整しながら読書をする事になる。これから見ても、軸のない続紙の卷子用の書見台だったことは明らかである。

★ 図③ 書見台模型

紫檀金銀絵書几復原品（正倉院>> 書見台、奈良国立博物館蔵）第61回正倉院展図、2012年」

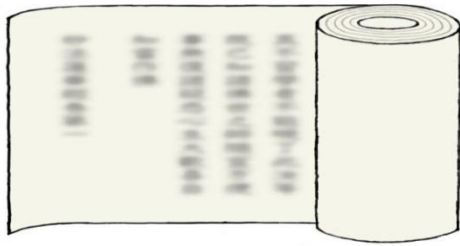


★ 図④ 左を開けたところ（想像）

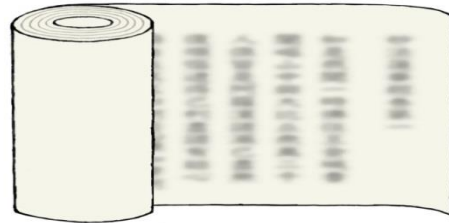


仏典や漢籍・漢文体（『日本書紀』等）の卷子は、例えば「法華経巻第一」などと、両端に首題と尾題が書かれている。尾題は、巻末からでも読めたことの名残である。

★図⑤ ⑥ 首題と尾題 （長い紙のはじめと終わりにタイトルが書かれている）



(尾題)



(首題)

一方、同じ卷子に書かれていても、『源氏物語』などの物語類や、歌書類には尾題がない。遺品を挙げると、勅撰集の編纂に際して応製百首歌を朝廷に奉った懐紙の卷子が、冷泉家時雨亭文庫にある。

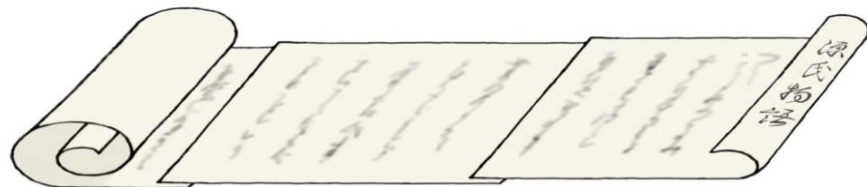
『新後撰和歌集』の『嘉元百首』二巻（冷泉家時雨亭叢書第三十四巻『中世百首歌 七夕御会和歌懐紙 中世私撰集』所収）、

『続千載和歌集』の『文保百首』二十一巻（同三十五巻『大嘗会和歌文保百首 宝治百首 六条知家』所収）、

『新後拾遺和歌集』の『永徳百首』十二巻（同三十四巻所収）である。

これらは懐紙を継いだ続紙で、端裏に詠者が書かれ、表紙も軸もない。

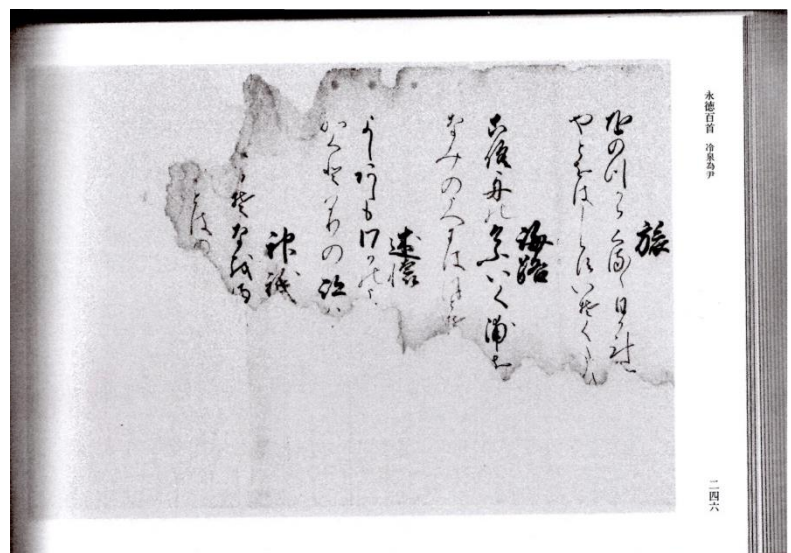
★図⑦ 首題のみ



特に『永徳百首』の冷泉為尹筆の卷子が巻頭より巻末の方が著しく破損しているのは、巻末が巻頭になっていたことを示している。

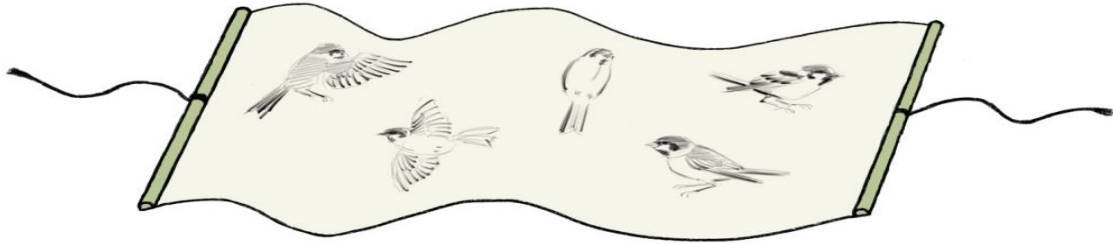
★図⑧ 巻末破損の様様

冷泉家時雨亭叢書第34巻『中世百首歌』中
『永徳百首』の中の1巻『冷泉為尹』巻末



九条家本『延喜式』（東京国立博物館蔵、国宝）は、平安時代後期（平安京図は南北朝時代の補写本という）の写本である。卷子装二十七巻は、表紙があるが軸はなく、巻末にも糊付けした痕跡がない。当初から軸はなかった。軸は、近世以降の修理の際に保存用に付けられた場合が多い。また、同館には、江戸時代の御用絵師で江戸狩野家の粉本（絵を習う時の手本）がある。その中に、両端に八双・紐と表紙・題簽が付いて、両端から開ける遺品があり、卷子本の機能が端的に表現している。

★図⑨ 両端に八双・紐が付いている ＜八双は軸になる細い竹 天地は中身と同寸＞



国宝『平家納経』は工芸の粹を集めた軸が付けられているが、これは平清盛が供養のために献納したものであって、読書するものではなかった。以上を踏まえて改めて卷子装を規定すると、「紙を継いで巻いたもの。保存には軸を付ける」となる。

★図⑩ 卷子本：参考図：軸のある卷子本・江戸期の皿



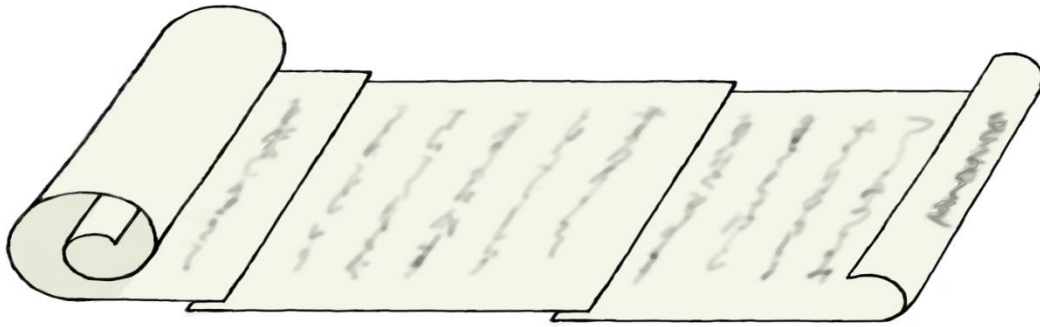
続紙の制作

続紙は、一枚一枚の紙の左右に糊付けした巻物（卷子本）である。糊付けの方法には、右手前と左手前がある。紙面には、滑らかなオモテ面ザラザラしたウラ面がある。紙継ぎは、オモテ面とオモテ面が向き合うように重ね合わせ、上の紙を横にずらして糊幅を出し、糊をつける。そして、上の紙を展開すると、綺麗に継ぐことができる。右端から継いでおけば右手前になり、左端から継いでいけば右手前に

なる。

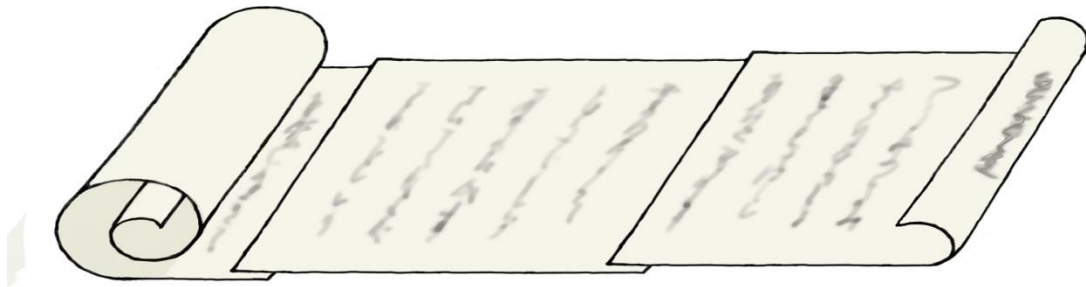
①左手前

縦書きの文章の文字は右から左に書くのが原則であるから、左に向かって紙を継いでいくのが自然である。左手前である。眼前に写すべき親本のない草稿本は必然的にこの継ぎ方になる。典型例に、軸がない系図がある。系図は子孫を書き足してくため、最終形の紙数が初めから決まっているわけではない。そのため左手前で継ぎ足していく。



②右手前

右手前は、巻末から巻頭に継いで行くことになる。巻末から継げるといのは、眼前に親本があることを示す。紙数が初めからわかっているために、見合った枚数の紙を継ぎ、親本と同じ状態で書写する。巻末から巻頭に向かって継いでいく方が能率的で、綺麗に継げる。現在、我々が見る大部分の卷子は右手前で紙継ぎされている。「明月記」は全巻右手前である。そうすると、定家が毎日書いた日記の原本から、晩年の七十三歳以降に書写したことになる。



③左右バラバラ手前

紙を継ぐ時、両端に糊付けするのではなく片方だけに糊付けする時は、どちらを手前にするか、こだわることなく継いで行く。その場合は、一巻の中で右手前／左手前が不規則に現れることになる。正倉院文書『手実帳』等が、その例である。

イラスト：野呂聡子

次回：続紙の「折返表紙」に続く